

## 第三十九回 ベートーヴェンの個人様式について歴史的・美学的考察

—「新しい道」～「傑作の森」の作品群をめぐって

### ○ベートーヴェン（1770年～1827年）の研究著書、論文等

文学者、作曲家；

ロマン・ロラン；『ベートーヴェンの生涯』、『エロイカからアパッショナータまで』などの著書

ワグナー；《第九交響曲》、《エロイカ交響曲》、《弦楽四重奏曲 Op.131》などについての論文

研究者；

アレクサンダー・ウィーロック・セイヤー著『ベートーヴェンの生涯』（1866～79年、1901～17年改訂）

ヴァルター・リーツラー『ベートーヴェン』（1936年）

メイナード・ソロモン『ベートーヴェン』（1977年）

※精神分析の方法を駆使し、ベートーヴェンの行動や性格を解明

ルイス・ロックウッド著『ベートーヴェン—音楽と生涯』（2003年）

※スケッチの研究から、作品と創作のプロセスに焦点をあて、芸術的發展を解明

### ○18世紀後半の時代背景と思想的背景

- ・啓蒙思想と市民革命
- ・市民の台頭と音楽都市の形成
- ・音楽都市ウィーン；ウィーン古典派 ※ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン

### ○18世紀後半の音楽についての考え方 【資料】ルイス・ロックウッド著『ベートーヴェン—音楽と生涯』

「快」の芸術～「表現」と「節度」；ハイドン

「快」と「自然」；モーツァルト

「個人の内面表現」＝ロマン主義；ベートーヴェン

### ○18世紀末～19世紀前半の時代背景と思想的背景

- ・フランス革命～ナポレオンの登場と失脚～ウィーン会議
- ・混迷の時代；ロマン主義へ

【DVD鑑賞】；Man and Music『革命の時代とベートーヴェン』

フランス革命～ナポレオンの時代、ウィーン古典派とベートーヴェン、ベートーヴェンのウィーン登場

## ○ウィーンにおけるベートーヴェンの創作期の区分

初期：1792年~**1802年 or 1803年**

1792年11月2日ボンを発ち、11月10日頃ウィーン到着

1797年頃~難聴と病に悩まされる。

中期：**1802年 or 1803年**~1812年

1802年「新しい道」の記述

1802年「ハイリゲンシュタットの遺書」

後期：1813年~1827年

**Point:** 「ハイリゲンシュタットの遺書」(1802年10月6日、10日)は「初期」か「中期」か？

## ◎「危機の時代」、「新しい道」、「ハイリゲンシュタットの遺書」～中期「傑作の森」へ

「危機の時代」：1798年~1802年

- ・聴覚障害の兆候

「ここ三年間で私の聴力はどんどん弱くなってきた」— ヴェーグラーへの手紙(1801年6月29日)

- ・聴覚障害と孤独

「私は惨めな生活を送っていると言えます。これまでほぼ二年間、どんな社交的な集まりにも顔を出すのをやめています。

それはひとえに、耳が聞こえないなどと人には言えないからです」— ヴェーグラーへの手紙(1801年6月29日)

**Point:** 聴覚障害と音楽家としての社会的孤立

「新しい道」：1801年頃~

- ・1801年頃からしばしば「新しい作曲、形式、スタイル」などを口にする

「私はこれまでの自分の仕事にあまり満足していません。今後は新しい道を歩むつもりです」— ツェルニー(1802年)

- ・ピアニストから作曲家へ

ピアノソナタ Op.13~28、Op.31 No.1~3

ピアノソナタ‘悲愴’ Op.13-2 (1798年)、『月光’ Op.27-2 (1801年)、『テンペスト’ Op.31-2 (1802年)

- ・ピアノ以外のジャンルでの創作

ヴァイオリンソナタ Op.24 ‘春’ (1801年)、Op.47 ‘クロイツェル’ (1802年)

第1交響曲 (1800年)、プロメテウスの創造物 (1801年)、第2交響曲 (1802年)

弦楽四重奏曲 Op.18 (1798年~1800年)

- ・七冊のスケッチ帳

- ・ジュリエッタとの恋

「彼女は私を愛し、私も彼女を愛している。この二年間には幸せなことも時にはあったのだ。結婚が私に幸福をもたらしてくるかもしれないと、初めて感じている」— ヴェーグラーへの手紙(1801年11月16日)

**Point:** 「新しい道」はいつから？「傑作の森」へつながる？

「ハイリゲンシュタットの遺書」(1802年)

- ・危機と苦悩：聴覚障害による社会的孤立、音楽創作への不安
- ・危機と苦悩からの解放(死)への切望
- ・「芸術」による「危機からの脱却」「苦悩の克服」

「私はほとんど絶望的になり、もう少しで自ら命を絶つところだった。私を引き留めたのは、ひとえに芸術だった。ああ、私に課せられていると感じたすべてを生み出すまでは、この世を去ることなどできないのだ」

— ハイリゲンシュタットの遺書(1802年10月6日、10日)

Point: 「遺書」か「独白」か?

Point: 聴覚障害と音楽家としての社会的孤立

Point: 聴覚障害と音楽創作

【楽曲解説】ピアノソナタ「悲愴」Op.13-2 第1楽章冒頭  
冒頭部分に注目!低音での密集配置の和音は響きが混濁する。

【DVD鑑賞】; Man and Music 『革命の時代とベートーヴェン』  
ベートーヴェンとピアノ、音楽家としての社会生活、弦楽四重奏曲 Op.18-6、ヴァイオリンソナタ Op.24「春」、  
ハイリゲンシュタットの遺書、「英雄」交響曲

【資料講読】ロマン・ロラン著『ベートーヴェンの生涯』

◎中期「傑作の森」の様式

「ハイリゲンシュタットの遺書」～名声の確立

Point: 「ハイリゲンシュタットの遺書」は苦悩を克服する決意表明→「英雄様式」

「傑作の森」:爆発的創造期:1803年~1812年

- 交響曲;第3交響曲~第8交響曲「英雄(エロイカ)」(1803年)、「運命」(1807年)、「田園」(1808年~)
- ピアノソナタ;「ワルトシュタイン」Op.53(1803年~)、「熱情」Op.57(1804年~)、「告別」Op.81a(1809年~)
- オペラ「レオノーレ」(1804年~)
- 「ラズモフスキー四重奏曲」Op.59(1806年)
- ヴァイオリン協奏曲Op.61(1806年)
- ピアノ協奏曲第5番「皇帝」Op.73(1809年)

Point: 当時の社会情勢とベートーヴェンの作曲活動

- ・「英雄」交響曲とナポレオンの戴冠

1803 年頃から第 3 交響曲の作曲を始める。

1804 年 5 月、ナポレオンが皇帝となるというニュースがウィーンで話題となる。

1804 年 12 月 2 日、ナポレオンの戴冠

「あの男も所詮は平凡な男に過ぎなかったのだ。自己の野心のために全ての人の人権を足元に踏みにじったのだ」

— F.リース『ベートーヴェンに関する伝記的覚書（1838 年出版）』

「このシンフォニーは本来『ボナパルト』とタイトルされたもので、通常のすべての楽器の他に特別に三本のオブリガート・ホルンを必要とします」— 8 月 26 日付のブライトコップフ・ウント・ヘルテル社宛の手紙

**Point:** ベートーヴェンが浄書スコアの表紙を抹消し、第 3 交響曲の表題を「ボナパルト」から「エロイカ」に書き換えた時期はナポレオンが戴冠式を行った 12 月 2 日以降と考えられる。

1804 年末~1805 年初、‘英雄’交響曲の数回にわたる公開初演と評判

「ベートーヴェン氏を心から尊敬するものだが、この作品では行き過ぎや奇抜さがあまりにも多く、そのため見通しが悪く統一感が失われているのを認めざるを得ない」— 2 月 13 日付の『総合音楽新聞（AMZ）』

「ベートーヴェンの最も親しい友人たち一派は、この交響曲こそ傑作であり、まさしく高度な音楽のための真の様式である、と主張している……別の一派は、この作品のどんな芸術的価値をも完全に否定する……第三の、これは少数派だが、前二者のどちらにも与しない者たちは、この交響曲に多くの美しさを認めるが、脈絡がしばしば断絶しているようなところがあることに気付いている。そして、すべての交響曲の中で最も長く、もしかしたら最も難解な曲の際限のない長さは専門家でさえも疲れさせ、単なる音楽愛好家には耐えがたいものである」— 『デア・フライミュニヒャー』4 月 26 日号

・フランス軍のウィーン占領とオペラ ‘レオノーレ’

1805 年 11 月 15 日、フランス軍のウィーン占領

1805 年 11 月 20 日、‘レオノーレ’ 第 1 稿（1804 年~作曲）初演 ※失敗

1806 年 3 月 29 日、‘レオノーレ’ 第 2 稿（1805 年~作曲）初演

※1814 年 5 月 23 日、‘フィデリオ’として 決定稿（1814 年~作曲）初演

・ヨゼフィーネへの愛 ※1957 年ベートーヴェンの手紙が発見される

「あなただけが—永遠のあなたが……私の慰め、私のすべて」— ヨゼフィーネ・ダイムへの手紙（1805 年春ごろ）

「私の心をあなたはもうずっと長い間占領してきました、愛するベートーヴェン……私の最大の証を、私の尊敬をお受けください……私の心を砕くようなことはなさらないでください。私はあなたを言いたいように愛しています。敬虔な精神が他の精神を愛するのと同じように。あなたはこのような愛を受け容れられるのでしょうか？今、私は別の愛を受け容れるようなことはできません」— ヨゼフィーネ・ダイムからベートーヴェンへの返事

・交響曲第 5 番 ‘運命’ と第 6 番 ‘田園’

1807 年~1808 年、‘運命’を書きあげたことには‘田園’に着手していた。

**Point:** 全く異なる様式での作曲

・ナポレオン軍の第二次ウィーン占領とピアノソナタ ‘告別’、ピアノ協奏曲第 5 番 ‘皇帝’

1809 年 5 月、ルドルフ大公の疎開と ‘告別’ の作曲 ※一年後に献呈

「告別 1809 年 5 月 4 日ウィーンにて尊敬するルドルフ大公殿下の出発に際して」— 第 1 楽章・自筆譜草稿に記載

1809 年 5 月 10 日、ナポレオン軍ウィーンを完全包囲

1809年春、フランス軍占領下で‘皇帝’の作曲 ※2年後に初演

1809年10月14日、オーストリアとフランス平和条約締結

### 【DVD鑑賞】『偉大な作曲家たち—ベートーヴェン』

耳が聞こえない、エロイカ交響曲、私生活、交響曲第5番「運命」、指揮者としてのベートーヴェン

### 【楽曲解説】ピアノ協奏曲‘皇帝’Op.73

カデンツァ＝ソリストの自由即興を排して、ソロによるカデンツァ風の楽句を作品構成に組み込む  
第1楽章冒頭（と再現部の開始部分）のカデンツァ風のピアノソロに注目！

### 【資料講読】

- ・ロマン・ロラン『エロイカからアパッショナータまで』
- ・ワーグナー『ベートーヴェンの《エロイカ》』

Point: ロマン・ロランをはじめとする文学的・ロマン主義的演奏解釈を多くの演奏家が参考にしている

## ◎ベートーヴェンの「英雄様式」をめぐって— 歴史と美術

### 歴史への関心と「英雄様式」の誕生

- ・革命とナポレオンの時代と芸術家たちは歴史への関心を深め、英雄的主題を求め、ギリシャ・ローマの古典の様式に学んだ ↓
- ・ローマの壮大さとローマの英雄の神話的要素が加えられ、「新古典主義（擬古典主義）」様式が成立
- ・ナポレオンがローマの英雄と重ね合わされ、「英雄様式」が成立

※ナポレオンの「第1宮廷画家」ジャック・ルイ・ダヴィッド（1748~1825）

Point: 19世紀の「英雄」のイメージとは？

### ベートーヴェンの「英雄様式」

- ・「ハイリゲンシュタットの遺書」に見られる苦悩の克服→英雄的闘争
- ・‘英雄’交響曲とナポレオン

ナポレオンとの共鳴：大いなる野望、力への意志、運命に対する感情をもつが、

その感情は、1803年の創作開始から1806年の出版まで、崇拜と嫌悪、是認と反感との間を揺れ動く

「ボナパルトに捧げることを切に願っている」…「ある偉大な人物の思い出」

※献呈、タイトルなどをめぐるベートーヴェンの言葉

- ・‘英雄’交響曲にみられる「英雄様式」とは？

‘英雄’交響曲：‘英雄’のタイトル、性格、規模の大きさ

「これまで書いた中で最大のもの」

●「英雄様式」は、ベートーヴェンの様式の重要なモデルだが、多様なモデルの一つに過ぎないと考えられる。

●「ハイリゲンシュタットの遺書」から「傑作の森」につながるベートーヴェンの創作における「英雄様式」の出現は、ベートーヴェンの様式理解にとって象徴的で重要な論点となる。

**【DVD 鑑賞】 ; Man and Music 『ベートーヴェン：革命的音楽家』**

ナポレオンと英雄交響曲、ナポレオンの進撃、自立した音楽家、ベートーヴェンの恋人、ナポレオン時代の終焉とベートーヴェン

## ◎ベートーヴェンの作品様式の理解と「ロマン主義」

### ○ベートーヴェンの作品におけるドラマトウルギーdramaturgy

- ・劇的要素：英雄的闘い、人間愛、情熱、慰め、諧謔、啓示、…etc.
- ・登場人物 character が描く人間ドラマ

男性—女性 ※ワーグナー 『ベートーヴェンの《エロイカ》』

ワーグナー

人生—運命

天使—悪魔

### ○ロマン主義の論点

- ・現実 vs 非現実（理想）→現実社会からの逃避
- ・個人の内面の表現（内向・ミクロコスモス）vs 無限性の表現（外向・マクロコスモス） etc.

**Point:** 音楽とロマン主義 — 他の芸術との違い

### ○音楽とは？

- ・作品としての存在について
  - 物質的に安定的な存在ではない
  - 作品の成立は作曲、演奏、聴取、のいずれか？
- ・対象表現について
  - 内的イメージを対象とすることはできるが、外的物象を（直接的に）対象とすることができない。
  - 現実界から最も遠い非現実界の存在

「音楽はそれ自身を対象とする自己目的芸術である」

「すべての芸術は音楽を志向する」（ショーペンハウエル）